



特集

地域に密着して循環するリターナブルびん

注目される地域密着型のびんリユースで求められるのは、
新たな仕組みづくりと現存する仕組みの維持。
さらにリターナブルびんの確保と洗びん・充填ラインの維持が課題になっています。

地域に根差したびんリユースの取り組みで、
「RDロップス」びん入り飲料が続々登場。

リターナブルびんは、回収率、回転率、輸送距離の条件が整えば、ワンウェイびんに比べて環境負荷が低く、容器包装廃棄物の発生も抑制でき、有効であると考えられています。このような視点から、現在、地産地消、町おこし、地域コミュニティづくりといった各地域の状況を踏まえながら、地域密着型びんリユースの新しい仕組みづくりが始まっています。

7年前に新しいリターナブルびんとして開発された「RDロップス」を採用した飲料は、現在5種類。東京の新宿区商店会連合会の「十万馬力新宿サイダー」に始まり、福井県池田町の「いけソーダ」、奈良の大和茶「と、わ(To WA)」、大阪撰茶「茶々」、岡山県産ほうじ茶「晴・Re・茶」などが続々登場しています。それぞれ地域に根差した取り組みにより、地元の理解を得る活動が進められており、さらなる広がりが注目されています。

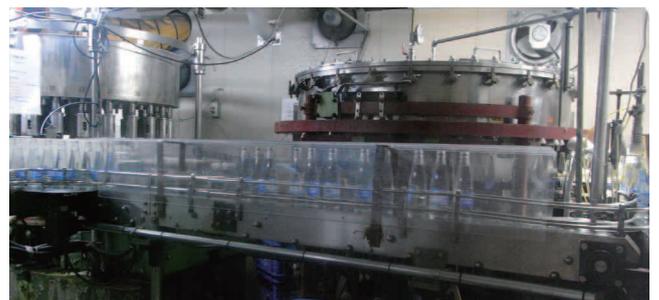


びんリユースを続ける地域のポトラーでは、
びんと洗びん・充填ラインを大切に使っている。

一方、古くからリターナブルびんを繰り返し使って、地元の業務用飲料などを生産してきた地域のポトラーにとっては、びんを確保していくことは重要な問題で、確実にびんが戻ってくる範囲内だけに出荷しています。また地サイダーが注目される中、2008年に全国清涼飲料協同組合連合会では、「中小企業活路開拓調査・実現化事業」において、Rマークが入った複製版リターナブルサイダーびんを開発しました。現在も、青森の八戸製氷冷蔵株式会社の「三島シロサイダー」と「三島バナナサイダー」で採用されています。今後、消費者や取扱店のリターナブルびん入り商品へのご理解とご協力が期待されます。

さらに地域のポトラーで切実なのが、洗びん・充填ラインを維持していくことで、古くから使っている設備をメンテナンスしながら大切に維持しているという状況が見られます。

取材協力：一般社団法人 全国清涼飲料工業会



▲能勢酒造株式会社の充填ライン

リターナブルびん充填メーカーの現状

能勢酒造株式会社 大阪府豊能郡能勢町

水と泡(炭酸)とリターナブルびんにこだわって、清涼飲料の製造事業を展開。



<http://www.eonet.ne.jp/~nosemizu/>

リターナブルびんの普及活動が評価され、「容器包装3R推進 環境大臣賞 最優秀賞」を受賞。

300年以上も前の1712年に、桜川の名水を使って酒造業を創業した能勢酒造は、1968年にミネラルウォーターの製造を開始。現在は水と泡(炭酸)とリターナブルびんにこだわって、清涼飲料のみで事業を展開しています。

同社に転機が訪れたのは15年ほど前のこと。町内のごみ焼却場からダイオキシンが検出され、風評被害に直面。ミネラルウォーターの事業が打撃を受けたことを機に、ニーズが高まっていた烏龍茶の商品開発に新たに取り組み、リターナルびんで提供することにしました。びんには山水画をデザインして、今までにないリターナブルびんとして注目されました。大手和食チェーンと協業で展開したこのリターナブルびんの普及活動が評価され、2008年度の「容器包装3R推進 環境大臣賞 製品部門最優秀賞」を受賞しました。



▲環境大臣賞 最優秀賞を受賞したリターナブルびん入り商品

関西地区を中心にご当地サイダーの開発にも対応。「Rドロップス」入りの3種類のお茶も手掛ける。

また能勢酒造では、同社のミネラルウォーターや炭酸水を利用して、自社製品の桜川サイダーの他、関西地区を中心に他社ブランドのご当地サイダーの開発にも関わっています。さらに新しいリターナブルびんとして注目される「Rドロップス」びん入り飲料の取り組みにも協力。大和茶「と、わ(To WA)」、大阪撰茶「茶々」、岡山県産ほうじ茶「晴・Re・茶」の3種類のお茶の製造を手掛けています。

同社の子安代表取締役社長は、「このままリターナブルびんを減少させてはいけない!我々のような小さな会社は、びんをリユースすることで、そこに価値を見出すことが大切です。時代の流れに合わせてリターナブルびんのカチを進化させていきたい!」とリターナブルびんへの想いを熱く語ってくれました。



▲洗びん機に向かう回収されたびん

取材協力: 能勢酒造株式会社

北陸ローヤルボトリング協業組合 福井県福井市

ご当地サイダー「さわやか」のびん入りは、リターナブルびんと2タイプのワンウェイびん。



<http://royal.cmbc.jp>

リターナブルびんに入った「さわやか」は、全国から集めた旧三ツ矢サイダーのびんを使用。

1968年に創立された北陸ローヤルボトリング協業組合では、福井県で30年以上も愛され続けているサイダー「さわやか」のほか「白龍烏龍茶」と「スマック」というクリームソーダをリターナブルびん入りで生産しています。

「さわやか」については、ワンウェイびんでも対応。リターナブルびんは全国から集めた旧三ツ矢サイダーのびんで、回収を考慮して県外には出荷せず、主に福井市内の駄菓子屋やお好み焼屋などに出しています。数に限りがある貴重な旧三ツ矢サイダーのびんは、大切に小出しに使っているとのこと。旧三ツ矢サイダーのイメージを踏襲したワンウェイびん入りの「復刻さわやか」は県外出荷に対応しており、県内観光地でのお土産用にもなっています。



▲ご当地サイダー「さわやか」のびん入り

エコに前向きに取り組んでいる池田町に、新リターナブルびん「Rドロップス」入りサイダーを提案。

同協業組合では、2012年に、エコに対して前向きに取り組んでいる県内の池田町に対して、地元の湧水を使った新リターナブルびん「Rドロップス」びん入りサイダーを提案。池田町ではこのサイダーを「いけソーダ」の愛称で広くアピール。お土産として、東京銀座にある福井県のアンテナショップにも出荷されています。

同協業組合の森田代表いわく「ガラスびんの良さは製品の品質が長持ちすることで、それが一番!10年以上経ってもおいしく飲めるものもあります」と、びん入り商品を賞賛。同協業組合におけるびん入り商品の品質管理は、空気圧の変化を考慮して、生産の5日後に人手による全数検査を実施しており、クレームはゼロとのことです。



▲びん入り商品の全数検査

取材協力: 北陸ローヤルボトリング協業組合



後藤鋳泉所

広島県尾道市

ラムネやクリームソーダなど6種類の飲料すべてをリターナブルびんで製造。

廃業した同業者からびんを引き取って使っているため、さまざまなデザインのびんに同じ飲料を充填して製造。

今から84年前の1930年に創業した後藤鋳泉所では、サイダー、ラムネ、クリームソーダ、ミルクセーキ、コーヒー、オレンジジュースの6種類の飲料を、すべてリターナブルびんで生産しています。また、周辺地域の同業者などから、使われなくなったびんを引き取って使用しています。そのため、中身が同じクリームソーダでも、さまざまなデザインのガラスびんに充填。王冠は1種類で、製造元や商品名はシールに印刷して王冠に貼っています。

6種類の飲料の中で一番人気があるのがラムネ。現在、口部がプラスチックのラムネびんが流通する中、ここでは、すべてがガラス製の厚みのある昔ながらのびんを使用しており、炭酸ガス圧の高い懐かしいラムネを提供しています。



▲6種類のリターナブルびん飲料



▲さまざまなびんに入ったクリームソーダ

テレビや雑誌、ネットなどで取り上げられたことで、珍しいびん入り飲料を求めて多くの人を訪れる。

後藤鋳泉所では、6種類のびん入り飲料を問屋に卸す一方で、同所においても販売しています。2006年に尾道と今治の間にある島々を結ぶ「しまなみ海道」が開通したことも影響して、テレビや雑誌、インターネットなどで取り上げられ、珍しいびん入り飲料を求めて、都会から多くの観光客が訪れるようになったとのこと。それでも貴重なリターナブルびんを守るために持ち帰りは厳禁。その場で飲んでもらうようにしています。

同鋳泉所では、小学生が見学に来たときには、ラムネの話とびんを回収して使っている話をすること。「世の中にはいろんな容器が出てきているけど、うちはリターナブルびんを使い続ける。ごみにならんしね!他に替えるつもりはない」と、後藤代表は力強く語ってくれました。



▲後藤鋳泉所の洗びん・充填設備

取材協力:後藤鋳泉所

八戸製氷冷蔵株式会社

青森県八戸市

全国で唯一、Rマークが入った復刻版サイダーびんを6年前から継続して使用。



<http://www.8-seihyo.co.jp>

地元の名水を使ったサイダーを、リターナブルびんとワンウェイびんに入れて生産。

1921年創業、90年以上の歴史がある八戸製氷冷蔵株式会社では、地元の名水と称される「三島の湧水」を使って、「三島シトロンサイダー」と「三島バナナサイダー」を生産しています。当初より旧三ツ矢サイダーの古びんをくり返し使用して、地元を中心に対応してきましたが、2005年頃の地サイダーブーム時に、懐かしい味とびんのレト口感覚が注目されるようになり、地方発送のニーズが高まってきたため、形状が似ているワンウェイびんを使って対応するようになりました。

また、旧三ツ矢サイダーのリターナブルびんが傷んできて、びんが減少してきたため、2008年に新しく開発されたRマーク入りの復刻版サイダーびんに、すべて差し替えました。使わなくなったびんは、リサイクルに回したとのこと。



▲復刻版リターナブル・サイダーびん入り商品

地元のサイダーが暮らしの中に溶け込み、飲んだ後はびんを戻すことが普通に行われている。

新しい復刻版サイダーびんは、旧三ツ矢サイダーのびんとほぼ同じ形状のため、ライン適性もよく、スムーズに差し替えることができました。新びんに差し替えたことにより、クレームはほとんどなくなり、また社内検査で排除されるびんも激減しているようです。

新リターナブルびんを導入してまで、びんリユースを続ける理由を、同社の橋本常務取締役に聞いてみると「この地域では、暮らしの中にサイダーが自然に溶け込んでいます。地元の人々は、びん入りサイダーをケースで購入して、あきびんをケースに入れて戻すことを普通に行っています」とのこと。

リターナブルびん入りサイダーの固定客がいて、びんリユースの仕組みがしっかり根付いている、まさに地域に密着したびんリユースが、いつまでも展開されていくことが望まれます。



▲三島サイダーを充填する設備

取材協力:八戸製氷冷蔵株式会社



第18回通常総会を開催。事業報告・決算報告 ならびに事業計画・収支予算が承認されました。

去る6月24日(火)、日本ガラス工業センターの会議室において、ガラスびんリサイクル促進協議会の第18回通常総会を開催しました。当日は会員会社の代表が出席し、平成24年度事業報告(案)・決算報告(案)と平成25年度事業計画(案)・収支予算(案)について審議され、いずれも承認されました。

また、当協議会が本年11月19日に創立30周年を迎えることを機に、名称を「ガラスびん3R促進協議会」に改定することが承認されました。



▲ 第18回通常総会

■平成26年度事業計画■

1.Reduce対策

- ①ガラスびん軽量化事例の収集と効果的な広報
- ②2015年第二次自主行動計画目標に向けたガラスびんの軽量化実績のフォロー

2.Reuse対策

- ①「びんリユース実証モデル事業」と連携による地域や市場特性に合わせたガラスびんリユースシステムの再強化
- ②「リターナブルびんポータルサイト」の鮮度維持と全国各地域での取り組みほか情報発信強化
- ③「びんリユース推進全国協議会」での十分な合意形成によるびんリユースの推進
- ④関係他団体と連携したガラスびんリユース推進に向けた課題整理と対応策の検討・実行

3.Recycle対策

- ①全国自治体別のガラスびん再商品化量の情報公開と基礎データの整備
- ②自治体への個別アプローチ展開と情報発信
- ③その他用途事例の情報収集・他用途業者との定期情報交換とホームページを通じた情報発信
- ④ガラスびんリサイクル適性の向上検討
- ⑤カレット品質向上に向けた啓発情報の継続的な発信

4.広報対策

- ①「びんの3R通信」と「Webサイト」による情報発信力の強化
- ②「ガラスびんBOOK小学生版」とワークシートほか小学生を対象とした補助教材の新規制作と活用
- ③「エコプロダクツ2014」を始めとしたイベントにおける「ガラスびんの3R」に関する直接広報活動の実施
- ④「びんtoびんリサイクル動画」「また会おうよ!リターナブルびん動画」の効果的な展開と「ガラスびんリデュース動画」の新規制作
- ⑤日本ガラスびん協会との消費者向け合同イベントの検討

創立30周年を機に、 組織名称を「ガラスびん3R促進協議会」に改定。

当協議会は、1984年11月19日に設立された前身の「ガラスびんリサイクル推進連合」より1996年に事業を引き継ぎ、ガラスびんの3Rについての普及・啓発に取り組んできました。おかげさまで、本年11月19日に、事業開始から30周年を迎えることとなりますが、これを機に、組織名称を「ガラスびんリサイクル促進協議会」から「ガラスびん3R促進協議会」に改定することを通常総会で決定しました。

平成26年度事業計画記者説明会を 日本ガラスびん協会と合同で開催。

去る7月17日(木)、食品・飲料・酒類業界紙と環境関連紙記者の方々にお集まりいただき、平成26年度事業計画の説明会を、日本ガラスびん協会と合同で開催しました。当協議会からは、「創立30周年記念誌」の発行や「創立30周年記念祝賀会」の開催に加え、30周年を機とした新たな取り組みをアピール。さらに「ガラスびん3R促進協議会」への名称の改定についても説明しました。



▲ 記者説明会

新宿区立鶴巻小学校の4年生児童を対象に ガラスびん工場の見学会を開催。

当協議会の今年度の事業として、全国小中学校環境教育研究会の協力のもと、小学生向けの「ガラスびん3R」教材を開発中ですが、その一環として、新宿区立鶴巻小学校の4年生児童を対象に、7月15日(火)、ガラスびん工場(東洋ガラス株式会社千葉工場)の見学会を開催しました。

子どもたちは、ガラスの塊(ゴブ)がISマシンへ入っていき、一度に何本ものびんが成形されているところが一番興味を持ったようで、見学後には多くの質問が活発に出了ました。

▲ 東洋ガラス株式会社
千葉工場

東京都小中学校環境教育研究会の主催で、 小中学校の先生方を対象にガラスびん3R見学会を開催。

去る7月22日(火)に、東京都小中学校環境教育研究会の主催で、ガラスびん3R見学会と題して、カレット工場(三栄ガラス株式会社川崎工場)とガラスびん工場(日本山村硝子株式会社東京工場)の見学会を実施しました。都内の小中学校から23名の先生方が参加され、各工場の現場を熱心にご確認いただき、ガラスびんの3Rへのご理解を深めていただきました。

▲ 三栄ガラス株式会社
川崎工場▲ 日本山村硝子株式会社
東京工場